

実れ 復興の綿花



東北コットンプロジェクト

競争力つける

「活動PRの展開は」「綿花を通して地域貢献の在り方とは」。アパレルメーカー「東北コットンプロジェクト」大手「アタストリア」(水戸市)の担当者はアイデア

下アパレルメーカー

産業化へ新たな段階

は、生産量が安定してきた。「綿花産業を東北に根付かせる」という目標を掲げ、製品化と販売ルートの確立という新たな段階に入っている。

メモ 2011年度産の綿花を使い、12年にポロシャツ、ジーンズ、タオル、ストールの4種類を製品化。13年度からプロジェクトに参加するメーカーが独自開発に着手し、今年8月現在、衣類のほか繊維類、雑貨などが加わり50種類に上る。開始当初、海外産オーガニックコットンとの混入率は1〜3%だったが、17年度に5%に伸びた。18年度産は10%を見込む。

「活動PRの展開は」「綿花を通して地域貢献の在り方とは」。アパレルメーカー「東北コットンプロジェクト」大手「アタストリア」(水戸市)の担当者はアイデア

「風化」を懸念

全国農業協同組合連合会

は、生産量が安定してきた。「綿花産業を東北に根付かせる」という目標を掲げ、製品化と販売ルートの確立という新たな段階に入っている。

ルや手拭いといった小物。「手に取りやすく、買いやすい」をコンセプトとする。

店長の佐々木香織さん(25)「仙台市若林区」は、震災の「風化」を懸念する一人。「プロジェクトが震災を機に始まったことを知らない客もいる。商品を目にするだけで、活動や震災への興味が全国に広がってほしい」と期待する。

「風化」を懸念

は、生産量が安定してきた。「綿花産業を東北に根付かせる」という目標を掲げ、製品化と販売ルートの確立という新たな段階に入っている。

年間20万〜40万円。ある生産者は、作業に来るボランティアをもてなす飲食代やイベント代など計上外の出費を含めると年間約100万円超の赤字が出ていると

安心が欲しい

「無償の社会奉仕」の意味を理解はしている。「東京都」は、生産者が持つ「手間をかけて作れば作るほど赤字になる」というジレンマの解消に心を砕く。

「無償の社会奉仕」の意味を理解はしている。「東京都」は、生産者が持つ「手間をかけて作れば作るほど赤字になる」というジレンマの解消に心を砕く。



「無償の社会奉仕」の意味を理解はしている。「東京都」は、生産者が持つ「手間をかけて作れば作るほど赤字になる」というジレンマの解消に心を砕く。

東日本大震災 7 年半